

Companies and Players of the Elizabethan Stage

佐野 隆 弥

(A) 1560年代以前：聖史劇，ギルドほか

エリザベス朝の職業劇団の起源は、中世聖史サイクル劇の同業者組合（ギルド）に遡ることができる。これらのサイクル劇は、14世紀後半から約2世紀の間、イングランド各地の都市で、毎年5月の下旬から6月の中旬にかけての聖霊降臨祭の後に、盛大に上演された。天地創造に始まり最後の審判に至る、聖書に取材したエピソードを繋ぎ合わせた、この連鎖劇は、市の役人や宗教関係者はもとより市民の大半が関わる一大イベントであったが、やはり実際の上演に当たっては、ギルドの果たした役割は大きい。個々のエピソードをどのギルドが担当したかは、様々な要因が関与したため一般化することは困難であるが、例えば『ノアの箱船建造』(*The Building of the Ark*)を舟大工組合が演じたり、経費と人員の必要な『最後の審判』(*The Last Judgement*)を隆盛を誇った織物商組合が受け持つなど、ある程度の関連性が存在したことも事実である。また同業者組合の職人芝居といっても、その水準はかなり高く、早くも15世紀初めには、出演役者の資格や条件を制限する基準が設定され、有能な役者は厚遇されていたようである。サイクル劇の人気と演技技術の向上——こうした流れの中から、役者業に特化する者が出現してくるのは自然の展開であり、旅興行へと活動範囲を広げていったと考えられている。

このようにして誕生した職業的旅役者は、少人数で一座を結成し、貴族の邸宅や市の公会堂、宿屋の中庭や学校施設などを巡業することで生計を立てていた。だが、旅役者という者は、主人と定住地を持たない浮浪者と紙一重の存在であり、この種の社会的通念が時に彼らの興行を困難なものにした。彼らが貴族のパトロンを持つことは、1540年代の浮浪者取締関連の布告に代表される、身分上の危機を回避する手段となるだけでなく、実際の興行においても好条件を引き出す有効な手立てとなったのである。このパトロン制の最古の実例としては、後にリチャード三世(Richard III)となるグロスター公爵(The Duke

of Gloucester) が、1482年にある劇団を後援していた記録が存在する。同時期には、他にもオックスフォード伯 (The Earl of Oxford) やダービー伯 (The Earl of Derby) など数名の貴族が劇団の庇護を行っていた。また貴族にとどまらず国王でも、ヘンリー七世 (Henry VII) が少なくとも1493年から国王幕間劇一座 (The Players of the King's Interludes) を抱えており、1494年の時点では4名で構成されていた。ヘンリー八世 (Henry VIII) はこの一座を増員し、メアリー一世 (Mary I) の治世後半には一座は女王一座 (The Queen's Men) の名称で旅興行を行っていた。さらに興味深い事例として、劇作家のジョン・ベイル (John Bale) は自前の劇団を所有し、(おそらくは宗教改革派の大物政治家クロムウェル (Thomas Cromwell) の後援のもと) 『ジョン王』(King Johan) 他反カトリック劇をひっさげて、1530年代後半に地方巡業に出ているのである。

さて、エリザベス朝の劇団勢力図を成人劇団と2分したのは少年劇団であったが、彼らの起源もやはりこの時代に求めることができる。例えば、代表的な、聖ポール寺院少年劇団 (The Children of Paul's) と王室礼拝堂少年劇団 (The Children of the Chapel Royal) の場合、(前者は、1378年のクリスマスに、旧約聖書に基づいた芝居を準備したとも言われているが) マスターと呼ばれる指導者のもと、従来の聖歌隊としての活動に加えて、本格的な演劇訓練を施されるようになったのは、16世紀に入ってからのものであった。元々これらの少年劇団は王室と関係が深かったが、聖ポールの方は1527年と1528年に、王室礼拝堂の方 (ただしこの場合少年ではなく大人だが) は1506-12年に、宮廷で上演を行なった記録が残されている。この後20年から30年間、資料の上では上演記録は途絶えるが、再び彼らが登場する1550年代には、聖ポール寺院少年劇団は劇作家ジョン・ヘイウッド (John Heywood) と連携した形で姿を現わす。ヘンリー八世からエリザベス一世 (Elizabeth I) に至る歴代の宮廷で、音楽家兼芝居書きとして活動していたヘイウッドなどと手を携えることで、少年劇団は宮廷での地歩を徐々に確かなものとしていったのであろう。そしてこのことが、成人劇団の未成熟という要因と相まって、1560年代の宮廷での上演回数 の圧倒的優位を生み出してゆくことになるのである。

(B) 1558-1572：少年劇団の優位とレスター伯一座

エリザベス一世の即位後のおよそ10年に当たるこの時期で、先ず注目すべき

事柄は、1559年の女王布告であろう。これは、無許可のインターロードの上演と、宗教または政治を扱ったすべての劇の上演を禁止したもののだが、その意図は、新教旧教の両極に大きく揺れ動いたイングランドの安定化を図るための政策として、理解することができる。だが、上演の許可制を謳うこの布告は、劇団発達史の観点から見ると、大衆劇の発展を後押しする効果を生んだ可能性がある。

前節でも触れたように、体系化された演技・歌唱指導を受けていた少年劇団の演技能力は、この時期成人劇団のそれを凌いでいた。E. K. チェインバーズ (E. K. Chambers) の調査によれば、1558年からシアター座 (The Theatre) 建設の1576年の間に、計78回宮廷上演に対する報酬支払いがなされているが、その内訳は、少年劇団に46回、成人劇団に32回というものであった。当時最高の檜舞台であった宮廷での公演で、少年劇団は高いシェアを誇った訳だが、彼らの優れた上演力をこの数値は端的に物語っている。先に言及した2つの少年劇団の他に、この10数年の間には、ウェストミンスター学校少年劇団 (The Westminster School) やウィンザー礼拝堂少年劇団 (The Windsor Chapel Children) といった劇団も活動を開始しているが、やはり聖ポール寺院少年劇団の存在が抜きん出ている。例えば、重要な演劇シーズンであったクリスマス期間における、宮廷での上演回数 (1572年まで) を比べてみれば、王室礼拝堂少年劇団が1564-65年にわずか1度だけ担当したのに対し、聖ポールの方は、1560-61, 1561-62, 1562-63, 1564-65, 1565-66 (3回), 1566-67 (2回), 1567-68 (2回), 1572-73の各年に (時には複数回) 上演を行なっている。聖ポール寺院少年劇団がかくも隆盛を誇った理由の1つとして、彼らのマスターの優秀さが考えられる。1540年代にマスターを務めたレッドフォード (John Redford) と1560年代1570年代を中心に活躍したウエストコット (Sebastian Westcott) —— 両者は共に当時の演劇を代表する指導的人物であり、その訓練水準の高さがこのような形で証明されていると、ひとまずは判断してよさそうである。

一方、成人劇団に目を転じると、宮廷上演や地方公演など、劇団としての公的な活動が記録に現われ始めるのは、(主要劇団の場合) 1550年代の後半からである。取り分け、1560年代の初頭から活動を開始していた重要な劇団に、ウォリック伯一座 (Warwick's Men) (正確にはこの名称はアンブローズ・ダドリー (Ambrose Dudley) が伯爵位につく1561年12月から) とレスター伯一座 (Leicester's Men) (同じくロバート・ダドリー (Robert Dudley) が伯爵位に

つく1564年9月から)がある。ウォリック伯一座は、1560年代では1564-65年に2回宮廷上演を行ない、また地方興行としては1559-60年のグロスター(Gloucester)を皮切りに各地を巡業している。記録上の劇団員は、サヴェジ(Jerome Savage)を筆頭に4名で構成されていた(ちなみにこのサヴェジは、レスター伯一座のリーダー、ジェイムズ・バーベッジ(James Burbage)が、1576年にシアター座を建設したように、同じ1576年頃、テムズ南岸の最初の公設劇場、ニューイントン・バッツ座(The Newington Butts)を建てている)。この2つの劇団はどうやらライバル関係にあったらしい。

レスター伯一座が記録の上で最も早く登場するのは、1557-58年にオックスフォード(Oxford)で興行した際のものである。1559年には、レスター自身が、北方院長官シュルーズベリー伯(The Earl of Shrewsbury, Lord President of the North)に、自分の庇護する役者たちがヨーク州(Yorkshire)で公演できるよう、公演許可証への署名捺印を依頼している。宮廷でも(1572年までに限って見れば)、1560、1561、1562、1572-73(3回)年に上演を行なっている。成人劇団の中でのレスター伯一座の優勢は、おそらくはレスター自身の権勢と、彼の積極的な庇護の姿勢とに関わっている。1571年11月、ロンドン市参事会は劇上演をすべて禁止したが、翌12月2週間も経たぬうちに、レスター伯一座は同参事会より市内公演の許可を取り付けているのも、このことと関連があるであろう。1572年1月3日、エリザベスは布告により、違法の従者・家臣を抱えることを禁ずる法令の施行を命じた。この違法家臣禁止法は役者全般にとり脅威であったため、レスター伯一座の面々はパトロン、レスターに向け、これまで通り従僕として抱えること並びにその身分証明書を発行してくれるよう、手紙で依頼している。この手紙には、バーベッジを始めとして、レイナム(John Laneham)、ジョンソン(William Johnson)、ウィルソン(Robert Wilson)(この3名は1583年、エリザベスのために女王一座(The Queen's Men)が結成された時、そちらに移籍した)など6名の署名が記されているが、彼らはレスター伯一座の幹部俳優であったと考えられている。1560年代のレスター伯一座は、当初こそ(レスターの威光による?)宮廷上演の機会があったものの、その後は少年劇団に駆逐され、また1570年代まではパトロンの直接的後押しもなかったようで、もっぱら地方巡業に活路を見出していたのである。

(c) 1572—1583：成人劇団の興隆

1572年は、劇団発達史の上で重要な年である。この年の6月29日、浮浪者取締法が公布された。今回の主な付加事項は、男爵以上の貴族の庇護、もしくは2名の治安判事の許可を受けていない剣術師、熊芸人、大衆劇俳優、吟遊楽人は、(居住地を離れて巡業した場合)浮浪者と規定されるというものであった。従来、この法令は、劇団の地方巡業を規制し、経済的に打撃を与えたものとして解釈されることが多かったが、実情は少し異なるようである。例えば、1572-73年のシーズン、レスター伯一座はブリストル(Bristol)で、サセックス伯一座(Sussex's Men)はブリストル、サマーセット(Somerset)で、ウスター伯一座(Worcester's Men)はブリストル、サマーセット、デヴォン(Devon)で、ウォリック伯一座はデヴォンで、それぞれ公演を行なっており、なおかつ前後の時期と比較してもこの時期に活動が落ち込んだ形跡は見当たらない。つまり、この取締法は、真の浮浪者と役者たちを弁別し、巡業劇団を認知し、彼らの上演権を保護する方向に機能したと考えられるのである。

さて、この法令に始まる10年間は、成人劇団が力量的に急成長を遂げた時期でもある。チェインバーズの調査を引き続き借用すれば、宮廷上演の報酬支払いは、1576年から1583年の期間になると、少年劇団の17回に対し、成人劇団は39回と逆転する。個別的に見れば、宮廷から遠ざかっていたレスター伯一座は、1572-73年に再び宮廷に姿を現わすと、その後1583年までの間に19回上演を行なっているし、ウォリック伯一座は12回、パトロンが宮内大臣であったサセックス伯一座も12回登場している。レスター伯一座が、成人劇団中のトップ劇団であった状況に変わりはないが、そのライバルはサセックス伯一座となった。レスター自身も1570年代の始めから、再び劇団と積極的に関わりを持ち始めたようで、(取締法への対抗措置か、ライバル劇団からの保護が理由なのか定かではないが)1574年、女王から特許状を得てやり、その結果、レスター伯一座は、疫病時と祈禱書朗読時を除き、ロンドン市その他において祝典局長の許可を得た劇を上演することが認められた。これは当時としては極めて異例の事態であり、それだけにレスターの権勢を窺わせるものであるが、レスターと演劇の関係はこれだけにとどまらない。

エリザベスは恒例の夏期巡幸として、1575年7月、レスターの居城のあるケニルワース(Kenilworth)を訪れ、そこに18日間滞在したが、その間贅を尽くした様々な歓待行事が行なわれた。その最大のものが水上ペイジェントで、

この構想・執筆・実演に当たったのは、詩人・劇作家のギヤスコイン (George Gascoigne) と王室礼拝堂少年劇団のマスター、ハニス (William Hunnis) であった。女王の巡幸には、この少年劇団が随行することが慣例となっていたため、歓待行事の多くは彼らが担当したものと考えられている。また、記録上の証拠は全くないのだが、レスター伯一座もこの饗宴に参加した可能性がある。もしそうなら、成人・少年両劇団が女王の御前で競演したことになり、移り行く劇団勢力圏を何やら象徴しているようで、興味深い。

1576年、レスター伯一座のパーベッジは、ロンドン北郊のショアディッチ (Shoreditch) に、大工組合の組合員という資格を利用して、初の本格的公設劇場・シアター座を建設した。実はパーベッジは、彼の妻の兄弟が1567年に建てたレッド・ライオン亭 (The Red Lion) と何らかの関係をすでに持っていたのだが、この劇場のその後はつまびらかではない。おそらくは時期尚早で、経済的に失敗したのであろう。そのパーベッジが、敢えて劇場建設に踏み切ったということは、この時期、成人劇団による公演が、演技能力や集客力の点で商業ベースに乗るとの確信が、彼にあったものと考えられる (そしてその確信はやがて現実のものとなる)。パーベッジにとり、シアター座建設はヴェンチャー・ビジネス的なものであって、劇団のための拠点確保という意味合いは、薄かったようである。事実、レスター伯一座とシアター座との関係は、記録で見ると限り判然としない。1570年代の成人劇団は、ロンドンや宮廷での公演と並行して、地方巡業にも重点を置いていた、というのが一般的な形態であった。

一方、少年劇団は、基本的には1560年代以来の安定した活動を継続していたが、急成長した成人劇団に徐々にその地位を奪われ、次第に変容を迫られていく。王室礼拝堂少年劇団はマスター、ハニスの指揮下にあったが、1576年、ウィンザー礼拝堂少年劇団のマスター、ファラント (Richard Farrant) を補佐に迎えた。彼は死去する1580年まで、この補佐役を兼任したが、その間両少年劇団の合同公演も行なわれた。ファラントは、成人劇団関係者による2劇場建設に刺激されてのことであろう、1576年旧ドミニコ会修道院の2階の大広間を賃借し、(1584年までの間) 上演を一般に公開して商業演劇に乗り出した (演劇史では通常、この時期のことを、第1期ブラックフライアーズ座 (The Blackfriars) と呼称する)。さらに、王室礼拝堂少年劇団は、1580年代に入ってから地方巡業も開始し、(1583年まででは) 1580-81年にはノリッジ (Norwich) を、1581年にはブリストルを訪れている (ただし、彼らは記録上オックスフォード少年劇団 (Oxford's Boys) と呼ばれているが、この経緯は次節で記述す

る)。宮廷上演に関しては、シェアは減ったとはいえ、1570年代後半から1580年代にかけて断続的に登場しており、特に1580年代の始めに上演した芝居の1つが、ピール (George Peele) の『パリスの審判』(*The Arraignment of Paris*) と推定されていて、この頃より大学才子 (University Wits) との繋がりが生まれたものと考えられる。

他方、聖ポール寺院少年劇団は、この時期王室礼拝堂少年劇団より宮廷上演回数が多かったが、目立った変化は見せていない。それでも演劇の商業化を睨んでのことであろう、1575年頃寺院の境内に上演公開用の会堂が建てられたし、マスターのウェストコットが1582年に死去した後、より一層の商業路線が取られていく。また、高い技術水準と商業主義で急激に台頭してきた劇団に、マーチャント・テイラー少年劇団 (*The Merchant Taylors School*) がある。マルカスター (Richard Mulcaster) 指揮のもと、記録上1572年より上演を開始し、宮廷でも6回演じているが、マルカスターが1586年に雇用側と争議を起こし劇団を去った時点で、活動を停止したようである。

最後に、祝典局長と演劇との関わりについて言及しておこう。そもそも祝典局長とは宮内大臣直属の官吏であり、宮廷で催される余興や祝祭、芝居などの担当者であった。しかし、1574年にレスター伯一座に与えられた特許状にも触れられているように、1570年代に入ってから、祝典局長は上演劇の検閲・統制をも職務とするようになる。そして、ティルニー (Edmund Tilyney) が局長職に就くのが1579年。さらに1581年、ティルニーに、宮廷の祝典行事責任者および演劇検閲官としての権限の大幅な拡大を認める特許状が付与され、これ以降1606年頃まで、彼は芝居の上演認可の面で大きな力を振るうことになる。

(D) 1583—1594：エリザベス女王一座と成人劇団の再編

大学才子からキッド (Thomas Kyd)、マーロウ (Christopher Marlowe) へ、そしてシェイクスピア (William Shakespeare) の登場へと、劇作家たちの急激な世代交替が展開されたこの10年は、成人劇団や役者のめまぐるしい再編が生じた10年でもある。その中で注目すべき存在は、レスター伯一座、女王一座、ストレインジ卿一座 (*Strange's Men*)、海軍大臣一座 (*The Lord Admiral's Men*) の4劇団であろう。

1583年、女王の側近ウォルシンガム (Sir Francis Walsingham) は、祝典局長ティルニーに、既存劇団の中から才能ある優秀な役者を選抜し、新劇団を

結成するよう命じた。女王の名と庇護を直接戴く劇団を創設することで、当時高まりつつあったロンドン市当局の激しい演劇攻撃を和らげる意図があったとも、劇団間の過当競争を抑制するためとも考えられている。このようにして12名の役者——レスター伯一座からは既述のレイナム、ジョンソン、ウィルソン、オックスフォード伯一座 (Oxford's Men) からはダットン (John Dutton) 他、サセックス伯一座からは人気喜劇役者のタールトン (Richard Tarlton) など——が集められたのである。女王一座はエリザベスという絶対的な権力を背景に、定期的に宮廷での上演をこなしたが、極めて精力的に地方巡業も行なっている (1586-87年のストラットフォード・アポン・エイヴォン (Stratford-upon-Avon) 公演が、シェイクスピアが演劇界に入る直接のきっかけとなった、とする説も存在する)。だが、5年間にわたる女王一座の繁栄も1588年を境に徐々に下降線をたどることになる。通常、この年に人気道化役者のタールトンが死去したことが主要な原因とされている。もちろんそれも大きな要因ではあるが、しかし実態はより複合的で、ストレインジ卿一座や海軍大臣一座との競合、清教徒がイングランド国教会の主教を攻撃したマーティン・マープレリット (Martin Marprelate) 論争 (1588-90年) に巻き込まれたことなども考慮しなければならない。実際、女王一座が1590年代の始めまで、ロンドンでも地方でも最も高額な報酬を支払われていたことは、この劇団の地位の高さを証すものであろう。女王一座はタールトンの死で一気に没落した訳ではなかったが、演目の古さで人気を失い、また劇団員の移籍などもあって、2大劇団時代を迎える1594年頃には実質的な役割を終え、その後は残存劇団員がちょうど王朝の移り変わる1603年頃まで地方公演を続けたが、やがて演劇界の表舞台から姿を消していった。

一方、女王一座の発足にともない、主力級の役者の半数近くを引き抜かれたレスター伯一座は大きな打撃を受けた (バーベッジは1576年以降ロンドンに留まり、劇団員としての活動は止めていた)。おそらく役者を確保するためであろう、彼らはしばらく上演活動を休止していたが、1584-85年から地方巡業を再開している。また、レスター自身の劇団員に対する支払い記録から、1585年までには道化役者ケンブ (Will Kemp) が加入したことが判明している。同じ1585年、レスターが指揮官として低地諸国に赴いた際、彼は数名の楽士と15名の役者を随行させたが、その中にはケンブやブライアン (George Bryan)、ポー (Thomas Pope) などが含まれていた (ただし、後2者が正式の劇団員であったかどうかは不明)。彼らは翌1586年デンマークの宮廷でも上演を行な

っているのだが、興味深いことに同じ時期、レスター伯一座が地方巡演をした記録も残されている。これはどうやらレスター伯一座が二手に分かれて活動したためようで、女王一座にも同類の活動形跡が見出されている。レスター伯一座は、1586年12月最後の宮廷上演を行なうが、このことから、彼らがこの時期まで有力劇団であったことが推察される。1588年にレスターが死去した後、一座がどうなったかを知る手がかりはないが、状況証拠から、ケンプ、ブライアン、ポーブらはストレインジ卿一座に加入したものと考えられる。

ストレインジ卿一座の歴史は複雑である。北方の大貴族スタンリー家 (The Stanleys) は、ヘンリー八世の時代より劇団の庇護を行っていたが、1570年代には、父親の第4代ダービー伯と息子のストレインジ卿ファーディナンド (Ferdinando, Lord Strange) は、それぞれ別個の劇団を後援していた。この2劇団の詳細な関係は不明だが、ストレインジ卿一座の方は曲芸師中心の構成で、1581年と1583年に宮廷でも演技を披露している。役者集団としてのストレインジ卿一座は、1580年代の終わりには、海軍大臣一座と並んで有力な存在となっていたが、レスター伯一座からの補強を除けば、このあたりの経緯もよく分からない。いずれにしろ、ロンドン市長の上演禁止命令に違反し、数名の劇団員が投獄された1589年の後半には、重要な劇団の1つになっていた。1590年頃より、ストレインジ卿一座は海軍大臣一座と合同公演を行なうようになる。女王一座への対抗などもその理由の一部なのであろう。海軍大臣一座のアレン (Edward Alleyn) を中心にシアター座で活動していたが、1591年に劇場の収益金をめぐって劇団とバーベッジとの間で争いが起き、訴訟沙汰にまで発展した。バーベッジと袂を分かったアレンは、1592年の早い段階でストレインジ卿一座のケンプ、ブライアン、ポーブ、ヘミングズ (John Heminges, 女王一座より移籍)、フィリップス (Augustine Phillips)、カウリー (Richard Cowley) らと共にヘンズロウ (Philip Henslowe) のローズ座 (The Rose) に移る。ヘンズロウの『日誌』(Diary) から、この合同劇団が1592-94年の間 (ただし、ペスト流行のための地方巡業時は除く) ローズ座で公演していたことを、我々は知ることができる。

ところで、この1592年は演劇関係者にとり多難な年であった。この年に再燃した外国人排斥運動は、6月には、劇場に集まった群衆に暴動を引き起こさせてしまう。それを受けて枢密院は9月までの上演禁止命令を出す。その折この夏から猖獗を極めたペストの大流行は、結局1594年の春まで続き、そのため冬季の一時期を除き、上演禁止命令はほぼ2年間継続されることになった。当

然劇団としては地方巡業に活路を見出す以外に生存の道はなく、実際、ストレインジ卿一座も海軍大臣一座も、時には個別に時には合同で巡業に出たが、(おそらくはアレンによる請願に対し) 1593年5月に枢密院が下賜した合同巡業特許状には、カウリーを除く先の6名の名前が記されている。また、ストレインジ卿一座は、パトロンのストレインジ卿が1593年9月に伯爵位を継いだため、伯爵が死去する1594年4月までの短い期間、ダービー伯一座 (Derby's Men) を名乗ることになる。

さて、アレンがシアター座を去った時、すべての役者が行動を共にした訳ではなかった。この問題を考える際鍵になる人物が、パーベッジの息子リチャード (Richard Burbage) である。合同劇団がシアター座に拠っていた時、彼は正式な団員ではなかったが、公演に参加していた。しかし、先述した収益金をめぐる騒動の際、彼は父親の権益を擁護する側にまわり、アレンらと訣別した。そして、残存役者などを束ねて、ペンブルック伯 (The Earl of Pembroke) の庇護を仰ぎ、ここにペンブルック伯一座 (Pembroke's Men) が発足した。だが、折から劇場閉鎖の時期。彼らは経営的に行き詰まり、巡業には何度か出たが最後にはその資金調達にも失敗し、実質的には1593年の秋解散の憂き目に遭う。その時一座は衣装や芝居台本を手放すのだが、その中の1本『タイタス・アンドロニカス』(Titus Andronicus) は、リチャード・パーベッジと、そしてシェイクスピアに関する、数少ない情報を提供してくれる。『タイタス』はこの一座最大のヒット作であったが、その1594年4つ折本タイトル・ページには、3つの上演劇団が、ストレインジ卿一座→ペンブルック伯一座→サセックス伯一座、の順に記載されている。様々な状況証拠を照らし合わせると、リチャード・パーベッジとシェイクスピアは、このような形で移籍を重ねていったらしい。すなわち、合同劇団と同様、1593年の夏に地方巡業を続けていたサセックス伯一座は、その年の暮れから1594年の1月にかけての、ロンドンでの短い上演解禁期間に、ヘンズロウの下で興行を行なったが、その際パーベッジやシェイクスピアらが補強の意味で合流したと推測されるのである。

海軍大臣一座は、そもそもパトロンのハワード (Charles Howard) にちなみハワード卿一座 (Howard's Men) の名で、1570年代の後半から活動を開始したが、1585年にハワードが海軍大臣に就任したことから、海軍大臣一座と名乗るようになった。宮廷への登場は早く、1576, 77, 78年と連続して公演しており、地方巡業も同時期から行なっている。宮廷公演は、その後1585, 86, 88, 89年と続いてゆくが、これはパトロンの大臣就任とも関係があろう。海軍大臣一

座の中心役者はアレンであるが、彼はもともとウスター伯一座の所属であり、少なくとも1584年の2月までそこに在籍していた記録が残されている。アレンの海軍大臣一座への移籍がいつなのかは不明だが、ハワードの大臣就任時との説もあり、おそらく一座はこの頃より隆盛に向かうのであろう。マーロウの斬新な悲劇を上演するなどして人気を獲得していった一座は、すでに述べた通り、1580年代の終わりにはストレインジ卿一座と相並ぶ有力劇団となっていた。その後はストレインジ卿一座との合同公演、シアター座との訣別と続く訳だが、1592年の初期にローズ座に移ったアレンは、そこでヘンズロウと良好な関係を築き上げたようである（ヘンズロウはこの頃、海軍大臣一座の集客力を見込んでか、ローズ座を拡張している）。と言うのも、同年10月、アレンはヘンズロウの義理の娘と結婚をしたからである。こうして、ヘンズロウとアレンは家族経営的な形態で、劇場と劇団の運営を行なってゆくことになり、その詳細をヘンズロウの『日誌』（1592～1603年）という第1級の資料から、我々は何ができるのである。

最後に、この時期の少年劇団の動向について記述しておこう。聖ポール寺院少年劇団はマスターのウェストコットの死後、ブラックフライアーズ座に拠る王室礼拝堂少年劇団に合流し、商業的公演を開始した。一方、実質的指導者のファラントを失った王室礼拝堂少年劇団は、紆余曲折の後、オックスフォード伯を庇護者に戴くこととなり、その関連でリリー（John Lyly）が作劇と運営に当たった。こうした経緯でこの合同少年劇団は、オックスフォード少年劇団と呼称された訳だが、1584年には5度宮廷に登場し、リリーの『キャンパスピ』（*Campaspe*）や『サフォとファオ』（*Sapho and Phao*）などを上演したと考えられている。この名称の合同状態がいつまで継続したかは、正確には分からないが、宮廷上演や地方巡業の記録から判断する限り、1580年から少なくとも1585年頃まで続いたようである。

王室礼拝堂少年劇団は、1584年にはブラックフライアーズ座の使用権を失い、以降商業演劇からは姿を消す。聖ポール寺院少年劇団は、同じく1584年、新たなマスターとしてジャイルズ（Thomas Giles）を迎える。ジャイルズはリリーと共同で、1586年から場所を聖ポール寺院に移して、2つの少年劇団を指揮した。彼らは1587年から定期的に宮廷で上演を行なったが、以上の事情からこの（第2次の）合同少年劇団は記録上、聖ポール寺院少年劇団と記されている。ところが、彼らは1590年を境に10年近く姿を消してしまう。このあたりの事態の展開は様々に説明されているが、リリーがマーティン・マーブレリット論争

に介入し、その影響を合同少年劇団が受けたとする説が有力視されている。

(E) 1594—1603：2大劇団の時代

1594年の春、長期にわたるペストの流行がようやく終息を迎えた時、それに先行する時期と同様、劇団間の大がかりな再編が生じた。詳細な異動は判明しないが、結果的には、それ以前と面目を一新する新生の海軍大臣一座と宮内大臣一座(The Chamberlain's Men)が、5月頃生まれた。両劇団は合同で、ヘンズロウのもとニューイントン・バツ座を舞台に、『タイタス』などを6月5日から15日までの10日間上演している。宮内大臣一座が記録に登場するのは、この時が最初である。だが、両劇団は何故か突然訣別し、宮内大臣一座はシアター座へ、海軍大臣一座はローズ座へと本拠地を移し、ここに2大劇団時代の幕が切って落とされる。

ハンズドン卿ヘンリー・ケアリ(Henry Carey, Lord Hunsdon)がパトロンを務めるハンズドン卿一座(Hunsdon's Men)は、早くも1560年代半ばより活動を開始していたが、1580年代の後半には姿を消してしまう。従って、1594年に結成された宮内大臣一座は、このハンズドン卿一座とはまったく別個の存在である。この新劇団に集結した幹部俳優(劇団に共同出資し、劇団の株を分かち持つ)は、ケンプ、ブライアン、ポーブ、ヘミングズ、フィリップス、カウリー、リチャード・バーベッジ、シェイクスピア(座付き作者兼任)他と推定され、ストレインジ卿一座や(サセックス伯一座経由の)ペンブルック伯一座からのメンバーであった。一座は1594年のクリスマス・シーズンに早速宮廷で上演を行なうが、翌年の3月にその支払いがなされる際、ケンプ、バーベッジ、シェイクスピアが受取人であった旨の記録が残されている。1596年7月、ヘンリー・ケアリが死去し、息子のジョージ(George Carey)がパトロンの任に当たるが、彼が宮内大臣に就任する1597年3月までは、一座はハンズドン卿一座を名乗ることになる。

比較的順調に滑り出した一座ではあったが、1597年には困難に直面することになる。この年の7月28日、枢密院は諸聖徒日(11月1日)までロンドン3マイル以内での公演を禁止し、かつすべての劇場の取り壊しを命じたからである。実際に劇場が撤去されることはなかったが、枢密院のこの処置は、1596年にスワン座(The Swan)を建設した興行主ラングリー(Francis Langley)絡みのものであったらしい。(このラングリーは1597年2月に、再興されたペンブ

ルック伯一座とスワン座での1年間の上演契約を結んでいたのだが、同年7月一座は痛烈な政治諷刺を含む『犬の島』(*The Isle of Dogs*)を上演したため、作者の1人ジョンソン(Ben Jonson)や役者たちが投獄された。宮内大臣一座は劇場閉鎖の期間中地方巡業に出たが、2度とシアター座に戻ることはなかった。実は、この年の4月にシアター座の借地権が切れていたのである。一座はその後カーテン座(*The Curtain*)などに拠りながら公演を続け、1598年には同座でジョンソンの『癖者ぞろい』(*Every Man in His Humour*)を上演している。この劇にはシェイクスピアも出演しており、またコンデル(Henry Condell)やスライ(William Sly)の名も確認することができる。

さて、シアター座の行方であるが、先ず権利関係を整理しておこう。1576年にシアター座が建設された際、ジェームズ・パーベッジは21年間の借地契約を結んだ。この借地権は、1589年に長男のカスパート(Cuthbert Burbage)に譲られていたので、契約更新交渉はカスパートが担当した。1596年に開始された交渉は難航し、1597年2月にジェームズも死去し、遂に4月には契約切れとなってしまった。その後1598年9月、交渉は再開されたが、地主側がシアター座本体の所有権まで主張するに及んで、交渉は決裂する。パーベッジ兄弟は、宮内大臣一座の幹部俳優と協議の上、テムズ南岸バンクサイド(*The Bankside*)の地に新たな土地を見つけ、12月25日借地契約を締結する。そして28日、パーベッジ兄弟や大工職人たちはシアター座を解体し、翌年の1月に凍結したテムズの上をそりを使って、その木材をバンクサイドまで運んだらしい。このようにして、1599年9月グローブ座(*The Globe*)は完成する。柿落としには、『ジュリアス・シーザー』(*Julius Caesar*)、『お気に召すまま』(*As You Like It*)などが上演されたと考えられている。このグローブ座建設の特徴は、複数の人間が資金を出し合ったという点にある。すなわち、パーベッジ兄弟が5割、ケンプ、ポーブ、ヘミングズ、フィリップス、シェイクスピアがそれぞれ1割という具合であった(ケンプはグローブ座完成前に一座を離れたため、ケンプの持ち株はパーベッジ兄弟以外の4人で4等分された)。グローブ座のこのような建設・運営方法は、当時の他劇場と比べると、独特のものであったが、その背景には、実はパーベッジ兄弟の資金難という問題が存在していたのである。それは、彼らの父親ジェームズが1596年2月にブラックフライアーズ座を、大金を投入して買い取ったことが原因であった。この私設劇場を次男のリチャードが父親から引き継ぎ、改装工事まで施したものの、近隣住民が治安悪化を理由に猛烈な反対運動を展開し、使用差し止めの嘆願書を枢密院にまで提出した

(興味深いことに、嘆願者のリストには、一座のパトロン、ハンズドン卿と当時の宮内大臣コバム卿 (Lord Cobham) の名前が見出される)。結局、枢密院はこの嘆願を承認し、ブラックフライアーズ座の使用を禁止した。シアター座の突然の解体やグローブ座の複数株主制には、こうした事情が関与していたのである。

ところで、権力の演劇への介入は、この時期も当然続いていたが、2大劇団にはむしろ保護的に作用していたと考えてよいであろう。1598年2月9日、1572年の浮浪者取締法の修正法が発令された。男爵位以上の貴族の庇護を受けていない役者は乞食と見なされ、処罰の対象となるという内容である。また同年2月19日、枢密院は、ロンドンを本拠とする劇団を海軍大臣一座と宮内大臣一座の2劇団に限り、第3の劇団の活動を禁じる命令を発布したが、これは明らかに両劇団の公認と優位の保証を意味するものである。さらに、宮内大臣一座は、1601年2月8日に起きたエセックス伯 (The Earl of Essex) の反乱に巻き込まれることになる。その前日に、エセックス伯支持者の依頼で、「リチャード二世 (Richard II) の廃位と殺害を扱った劇」を上演したためである。劇団関係者が当局の諷問を受けたが、特別な咎めはなく、一座は大きなダメージを被ることなく切り抜けることができた。

では次に、海軍大臣一座の展開に主題を移そう。ローズ座に移動した新生海軍大臣一座は、ヘンズロウ＝アレンを中心とする体制に変化はなかったものの、新しい劇団員としてタウン (Thomas Towne)、スレイター (Martin Slater)、ジュビィ (Edward Juby) などを迎えていた。ヘンズロウ＝アレン体制の特徴は、新作中心の、徹底的な日替わりレパートリー・システムにある。そのため、宮内大臣一座のように座付き作者は持たず、様々な劇作家を手付け金で拘束し、仕上がった作品を買い取る方式を敷いていた。デッカー (Thomas Dekker)、チャップマン (George Chapman)、トマス・ヘイウッド (Thomas Heywood) などが、この時期ヘンズロウと取引きをしていた主な劇作家である。ヘンズロウは役者の雇用に関しても契約制を取り、この点も宮内大臣一座の共同株主制とは大きく異なっている。有り体に言えば、海軍大臣一座はヘンズロウのワンマン経営に近い運営形態を有していた訳である。

海軍大臣一座は、1596年10月にパトロンがノッティンガム伯爵 (The Earl of Nottingham) となつて以来、ノッティンガム伯一座 (Nottingham's Men) を名乗るようになったが、そのような名称変更にも増して重要な変化は、看板役者アレンの引退である。彼は1597年後半に舞台を去り、都合3年間役者稼業

から遠ざかっていたが、その間ヘンズロウの片腕として興行に専念していた。しかし1600年、アレンは舞台に復帰する。この復帰は、同じ年のフォーチュン座 (The Fortune) 建設と密接な関係があると考えてよいだろう。宮内大臣一座のグローブ座による南進に対抗する形で、ヘンズロウとアレンは、逆にテムズ川を北上し、ロンドン北郊の地に1600年1月から半年間を費やして、新劇場を開設したのであった。彼らの対抗意識は、グローブ座を建てた大工の棟梁ストリート (Peter Streete) 本人と契約し、外形こそ正方形となったものの、内部の基本構造はグローブ座に倣うべしとの指示に、明瞭に見て取ることができる。また、アレンがこのプロジェクトの中心にいたことは、フォーチュン座の完成を許可するよう要請した、ミドルセックス州 (Middlesex) 治安判事宛の枢密院の文書 (1600年4月8日付) で確認することが可能である。結局アレンは、この新劇場で2年間再び役者を務めることになる。

アレンが最初に引退した1597年は、ヘンズロウにとっても変化の年であった。この時期アレン以外にも、3名の幹部俳優が一座を去る。そして、ペンブルック伯一座絡みの劇場取り壊し命令が発令された後、ヘンズロウの『日誌』は、それまでの上演演目や収益金の記録から離れて、劇団や劇作家への前渡し金、上演許可のための申請料、役者との雇用契約などを主として記載するようになる。ヘンズロウの興行への管理強化を明示する形で、この『日誌』は1603年まで書き続けられる。

ところでこの時期、上演活動を展開していたのは、もちろん2大劇団だけではなかった。確かに、枢密院はロンドンに本拠を置く劇団としては、2大劇団しか認可しなかったが、地方巡業で生き長らえていた劇団は少数ではなかった。そのような中で、ウスター伯一座とオックスフォード伯一座の合同一座が、第3の劇団としてボアズ・ヘッド亭 (The Boar's Head) で公演を行なうことを、1602年3月枢密院から許可された。この認可の背景には、おそらくウスター伯の宮廷における権勢が関係している。彼らはその後空き小屋となっていたローズ座に移り、ヘンズロウの指揮下に入る。主な劇団員としては、1599年に宮内大臣一座を辞したケンブや劇作家兼業のトマス・ハイウッドなどがいた。

さて、1590年頃を境に姿を消していた少年劇団であるが、世紀の変わり目を前に再び表舞台に登場してくる。聖ポール寺院少年劇団はマスターにピアース (Edward Pearce) を迎え、また劇作家としてマーストン (John Marston) と組むことで、1599年頃本格的に商業演劇の世界へ復活してきた。それ以降、彼らはマーストンの他に、デッカー、ミドルトン (Thomas Middleton)、ウ

ウェブスター (John Webster) などの作品を上演してゆく。また宮廷でも、(エリザベス存命中には) 1601年と03年に公演を行なっている。一方、王室礼拝堂少年劇団の方は、エヴァンズ (Henry Evans) を中心とする運営体制が敷かれた。エヴァンズは、1600年9月リチャード・バーベッジからブラックフライアーズ座を借り受け、ここを本拠地として活動を再開する。(この賃貸契約は、ブラックフライアーズ座が不良債権化していたこともあって、バーベッジにとり好都合であったし、上流階級を主な観客層としていた少年劇団が借り手であったため、近隣住民の反対も今回はなかったようである。) このような経緯のため、この時期の同劇場のことを第2期ブラックフライアーズ座と呼び、ここに拠った王室礼拝堂少年劇団を、ブラックフライアーズ少年劇団 (The Blackfriars Boys) と呼称することがある。彼らはジョンソンやチャップマンと提携し、宮廷にも1601年と02年に登場している。

1600-02年頃は両少年劇団の最盛期で、その勢いは、『ハムレット』(Hamlet) 2幕2場の有名な「鷹の雛」の台詞にもある通り、成人劇団を凌ぐほどであった。この少年劇団の人気には、いわゆる「劇場戦争」(Poetomachia) も一役買っていたことを付言しておかなければならない。これは基本的には、成人劇団=公設劇場に拠る劇作家と少年劇団=私設劇場に拠る劇作家との、いわば中傷合戦で、その意味では「劇場戦争」というよりは原語通り「詩人戦争」と理解した方が正確かも知れない。マーストンが『役者懲罰』(Historiomastix) でジョンソンを攻撃したのが事の始まりで、これに対しジョンソンは、『みんな癖が直り』(Every Man out of His Humour), 『月の女神の饗宴』(Cynthia's Revels), 『へぼ詩人』(Poetaster) などを次々と書いてマーストンに応戦し、さらにはデッカーにまで非難の矢を浴びせかけた。デッカーも『鞭打たれた諷刺家』(Satiromastix) ですぐさま反撃に出たが、この一連の中傷の応酬は、少年劇団がこの時期得意としていた諷刺喜劇と相乗効果を上げたようで、彼らの隆盛に貢献したと考えられる。

(F) 1603-1625: 王室の介入と国王一座の優位

ジェームズ一世 (James I) の治世における、劇団史上の特色は、従来の貴族に替わり王室全体がパトロンとして介入するようになったことである。1603年3月24日、エリザベスが崩御すると、同日中にジェームズ一世がイングランド王として即位した。彼はスコットランドから5月初めにロンドンに到着

したが、王としての執務開始間もない5月19日、旧来の宮内大臣一座を国王の使用人として召し抱える特許状を発行した。ここに新生国王一座 (The King's Men) が誕生した訳だが、エリザベスの病状悪化にともない発令された上演禁止令は、ペストの流行と相まって結局翌年の4月まで継続されることになり、出だしこそ地方巡業を余儀なくされたが、それでも1603-04年のクリスマス・シーズンには早速宮廷に登場している。ペントリー (G. E. Bentley) の調査によれば、劇団が国王一座となってからの10年間に、彼らは年平均13回の宮廷公演を行なっているが、これは宮内大臣一座時代の4倍に当たる数値であり、いかに国王一座が優位を誇っていたかが推測されるであろう。また、国王と劇団の関係も、今までの貴族による名目的な庇護にとどまるものではなく、より実質的な主従関係に移行していた。例えば、1604年3月15日、ジェームズの戴冠式が執り行なわれた際、劇団員は王の従僕として参列していたであろうし、同年8月、スペインとの関係改善のため同国特使が訪英した折、一座は3週間弱接待の役を務めたことが記録に残されている。

ジェームズ朝の初期、1610年頃まではしばしばペストが猛威を振るい、劇団は上演禁止を強いられた。1608年の後半もそうした時期の1つであるが、同時にこの年は国王一座にとり転回点になった年でもあった。同年、それまでブラックフライアーズ座に本拠を置いていた少年劇団が上演禁止命令を受けたため (この点については後述する)、バーベッジは同劇場の使用権を8月に取り戻すことができた。この劇場の運営に関しては今回も国王一座の幹部俳優が共同で投資を行ない、株を持ち合う形となったが、こうして同劇団は国王をパトロンに戴き、また夏期にはグローブ座で、そして冬期には室内劇場のブラックフライアーズ座で興行 (第3期ブラックフライアーズ座) することにより、ロンドンの商業演劇の世界で圧倒的な地位を築き上げた。国王一座が今度ブラックフライアーズ座を使用するに際して、近隣住民の抵抗は特になかったが、これは、それまでの少年劇団の活動が地ならしとなったからだ、との説も存在する。国王一座の公演の中でこの室内劇場の比重は徐々に高まっていったが、それに沿って一座の上演演目もロマンス劇やポーモント (Francis Beaumont) ・フレッチャー (John Fletcher) の悲喜劇へと変化してゆく。国王一座の宮廷上演回数、1610-13年にかけて1つのピークを形成するが、取り分け1613年2月の王女エリザベスとプファルツ選帝侯 (The Elector Palatine) との結婚式の前後には20回もの公演を行なっている。だが、この同じ1613年6月29日、新作『ヘンリー八世』 (*Henry VIII*) の上演中に、グローブ座は火災に見舞われ、

完全に焼け落ちてしまう。翌年には幹部俳優らの出資で、最初のを凌ぐ第2グローブ座が完成するものの、劇団にとっては相当のダメージであったに違いない。そして、1612年頃にはロンドンを離れていたシェイクスピアが1616年に死去し、パーベッジも1619年にはこの世を去る。国王一座は安定した優位を保ち続けたものの、この頃には、確かに1つの時代が終わりつつあった。

さて、エリザベス政府に公認された第2・第3劇団の行方であるが、ジェームズの即位ともないノッティンガム伯一座はヘンリー王子一座(The Prince Henry's Men)に、またウスター伯一座はアン王妃一座(The Queen Anne's Men)となった。ヘンリー王子一座はフォーチュン座を本拠地として活動を続けていたが、1612年にヘンリー王子が死去したことから、プファルツ選帝侯がパトロンとなり、一座の名称もプファルツ選帝侯一座(The Elector Palatine's Men)あるいはポールズグレイヴ伯一座(The Palsgrave's Men)へと変更された。劇団の運営は相変わらずヘンズロウの手に握られており、彼はその実利的経営者としての様相を一層色濃くしていったようである。彼は利潤追求を最優先とし、そのためにいくつかの劇団を恣意的に離合集散させたりしく、窮状を訴える役者たちの訴状も残されている。ヘンズロウは1616年に死亡し、また1621年にはフォーチュン座が衣装・台本もろとも焼失した。劇場は再建されたものの、一座は多大な損失を被り、1625年のベスト流行時に解散したものと考えられている。一方、アン王妃一座は1605年頃建てられたレッド・ブル座(The Red Bull) (観客の質が最下層の劇場)に拠りながら上演を行っていた。1610年代の一座は劇団株主との金銭問題に絶えず悩まされ、1619年のアン王妃死去をきっかけに遂に分裂する。そして、この一連の内紛で影の主役を演じていたのが、宮内大臣一座出身で幹部俳優のビーストン(Christopher Beeston)であった。彼はヘンズロウばりの手法で、自身の劇団のみならず他劇団にまで影響を及ぼすほどになっていたが、この分裂騒ぎに際して役者を再編し、新劇団を発足させている。この一座はパトロンを有しなかったが、ロンドンでの公演を許可され、1625年頃まで活動した。演劇史では通常レッド・ブル一座(The Red Bull Company)と呼ばれている。

この時期、上記の3劇団以外にも公認された第4の劇団が存在した。ヘンリー王子の弟のために1608年に結成されたヨーク公一座(The Duke of York's Men)がそれである。この劇団はヘンリー王子の死去後、チャールズ王子一座(The Prince Charles's Men)と改名するが、主にカーテン座やレッド・ブル座で公演し、1625年まで存続した。以上の4つの劇団が1610年代ロンドン

を代表する4大劇団であるが、この他にも1611年に結成されたエリザベス王女一座 (The Lady Elizabeth's Men) が、ホープ座 (The Hope) (1613年にヘンズロウが熊いじめ小屋を改装したもの) に拠って活動した。

ところで、少年劇団の活動状況であるが、王室礼拝堂少年劇団はめまぐるしい展開を辿ることになる。1604年2月、彼らは王室より特許状を与えられ、アン王妃祝典少年劇団 (The Children of the Queen's Revels) を名乗り、同月中に早速2度宮廷上演を行なっている。この一座はチャップマンやマーストンの戯曲を舞台にかけていたのだが、1605年スコットランド人を中傷する内容を含んだ『東行きだよーお』 (*Eastward Ho!*) を上演したため、作者たちは投獄され、さらに翌年同様に誹謗的な『阿呆鳥の島』 (*The Isle of Gulls*) 上演によって、一座は王室の庇護を失ってしまった。そこで経営陣は、同じ年に聖ポール寺院少年劇団が活動を停止した影響もあって、劇団の再編成を行なったが、1608年チャップマンの『バイロンの陰謀と悲劇』 (*The Conspiracy and Tragedy of Byron*) とマーストンのもう1本の戯曲が、フランス大使を怒らせたため、遂にジェイムズは一座の活動停止および解散を命じた。経営陣はブラックフライアーズ座を手放すなど再度再編に乗り出す。翌年にはホワイต์フライアーズ座 (The Whitefriars) に移り、また1610年には再び王室の庇護を獲得している。この頃には劇団の構成員はもはや少年ではなく、実際の公演形態等も成人劇団と大差なく、チャップマンやポーモン・フレッチャーの作品を上演していた。そして1613年、アン王妃祝典少年劇団は成人劇団のエリザベス王女一座と合体することで、少年劇団としての活動を終えることになる。

聖ポール寺院少年劇団の方は、既述のように1606年7月30日の宮廷公演を最後に記録は途絶える。おそらくここで活動に終止符を打ったのであろうが、その原因として検閲の強化や収入の不足などが指摘されている。また、1607-08年という短い期間に、国王祝典少年劇団 (The King's Revels Children) という一座が存在したことも付言しておく。

(g) 1625-1642: 興行主による劇団統廃合と祝典局長の役割拡大

チャールズ朝の開始は、ジェイムズ朝のそれによく似ている。1625年3月27日ジェイムズが崩御すると、同日にチャールズ一世 (Charles I) が即位した。彼は執務開始間もない時期に特許状を発行し、引き続き国王一座を庇護したが、ペスト流行のため8ヶ月間劇場は閉鎖され、一座は地方での活動を強いられて

いる。その後の国王一座は、1636-37年にかけて17ヶ月間にも及ぶベストによる上演禁止を経験するものの、特に大きな困難に直面することもなく、ロンドンの演劇界で圧倒的な優位を保ち続ける。

国王一座が生き延びた1625年のベストは、しかし、他のすべての劇団を統廃合の渦中に投げ入れた、と言っても過言ではないであろう。フォーチュン座で活動していた旧プファルツ選帝侯一座の役者たちは、アレンより同劇場の経営を引き継いだガネル (Richard Gunnell) の指揮のもと、エリザベス王女一座と合流し、ボヘミア国王・王妃一座 (The King and Queen of Bohemia's Men) を結成する。この劇団は1631年までフォーチュン座で活動を行なうが、同年ガネルはこれを解散再編し、新たに誕生したチャールズ王子をパトロンに迎えて第2チャールズ王子一座 (The Prince Charles's (II) Men) を発足させた。一座は、ガネルが1629年に建てたソールズベリー・コート劇場 (The Salisbury Court) で最初公演を行なっていたが、後にレッド・ブル座に移った (このように、特にチャールズ朝期には、経営者の思惑によって、劇団が私設屋内劇場と公設劇場との間を移動することは、珍しくはなかった)。

1625年の時点でレッド・ブル座に拠っていた (第1) チャールズ王子一座の役者たちが中心になって立ち上げたのが、新レッド・ブルー座である。この劇団は、その劇団名から分かるように、王室の特許状は得ていない。しかし、時の祝典局長ハーバート (Sir Henry Herbert) の許可は受けており、これで実質的には公認されたものとなっていた。この時期、祝典局長の権限が、検閲や上演・出版等の許可権にとどまるものではなく、劇団そのものの認可や、さらには劇団再編の指令にまで及んでいたことは、注目に値する。

一方、ピーストンは、新王妃ヘンリエッタ (Henrietta) をパトロンに戴くヘンリエッタ王妃一座 (The Queen Henrietta's Men) を、やはり1625年に発足させた。(チャールズ朝における王室の庇護は大部分が名目的だが、国王チャールズの場合は多少事情が違って、彼自身が熱心な戯曲の読者だったこともあってか、検閲で削除された台詞を復活させたり、あるいは逆に自ら台詞の変更を要求したりしている。) この劇団は、パーキンズ (Richard Perkins) を中心に、室内劇場のcockpit座 (The Cockpit) でシャーリー (James Shirley) の作品などを上演していた。最初の10年間は着実に発展し、1629-30年の冬のシーズンには宮廷で10本の芝居を (同時期国王一座は12本)、また翌年の冬のシーズンには16本の戯曲を上演している。しかし、1636-37年の1年半に及ぶ上演禁止の期間中、ピーストンは一座を解散し、替わりにピースト

ン少年劇団 (The Beeston's Boys) を結成した (そしてこの一連の動きに、ハーバートが積極的に絡んでいた)。ピーストンが1638年に死去すると、経営権は息子のウィリアム (William Beeston) に引き継がれたが、1640年無許可の芝居を上演した廉で一座は活動停止、彼も投獄され劇団の経営権を失った。そこで新たに一座の指揮を執ったのは、国王一座に作品を提供していた劇作家のダヴェナント (William Davenant) であったが、それも1年と続かず、劇団は再びピーストンの手に戻った。だが、彼が興行を軌道に乗せる前に、1642年9月議会は劇場の全面閉鎖を発令したのであった。

(H) 劇団の構成と運営

すべての企業体が経済変動に応じてその形態を変化させてゆくように、成長産業であったエリザベス朝の演劇興行も、時々刻々その姿を変えており、およそ80年に及ぶエリザベス朝演劇に共通する劇団の様態を一般化することは容易ではない。そこで、ここでは資料が比較的よく残されている2大劇団の時代を中心に記述し、必要な場合に他の時代にも言及することにしたい。

劇団の主体を形成するのは役者たちであるが、彼らは4つの階層に分類されていた。すなわち、幹部俳優—雇い役者—見習いあるいは徒弟—臨時のエキストラ、である。劇団を興すには当然まとまった資金が必要となるが、この出資金を分担し、劇団の株を保有し、それに応じた配当を受けていたのが幹部俳優=劇団株主 (sharer) であった。宮内大臣一座の場合、幹部俳優は自ら役者として舞台を務めながら、同時に興行や劇団経営に関わるあらゆる側面に責任を持った (海軍大臣一座では、後者はすべて興行主ヘンズロウの手に握られていた)。通常、幹部俳優は各劇団8-12名の人員であった。当時の劇団の収入は (公設劇場の場合)、棧敷席と立ち見席に分けて計算され、棧敷席収入の半分が劇場主に支払われ (=劇場使用料)、残り半分と立ち見席収入のすべては劇団のものとなった。しかしここから様々な必要経費——雇い役者の給料、台本購入費、台本検閲料、衣装・小道具代、興行教区への寄付金など——が差し引かれ、後に残った金額が持ち株に比例して配分された。(ちなみにグローブ座では、立ち見料1ペニー、棧敷席料2ペンス、特等棧敷席料3ペンス、またブラックフライアーズ座では全席6ペンスであった。さらに宮廷での上演では、1回につき10ポンドの手当が出ている。) ただし、台本や衣装を自前で購入できた劇団は宮内大臣一座など少数で、大半はヘンズロウのように興

行主に借金するケースが多く、そのことで劇団は一層興行主の拘束を受けることになった。

エリザベス朝演劇では、ほとんどの場合、劇場主＝興行主という形態を取っていたが、宮内大臣一座（国王一座）が本拠地としていたグローブ座とブラックフライアーズ座は、例外的に劇場主＝劇団株主が経営の舵を取っている。これは既述のように、パーベッジ家の資金不足が何よりの原因だが、劇団だけでなく劇場をも同一の幹部俳優が共有し合ったことは、この一座の家族的連帯感という性質を考える上で外すことのできない、極めて重要なファクターとなる。

次に、雇い役者であるが、彼らは臨時のエキストラとは違って、ある程度継続的に1つの劇団で仕事をし、空席が生じた場合などには、幹部俳優に昇格することもあった。当時の上演では、1人で何役もこなすのが普通であったが、それでも足りない時にこの雇い役者が投入され、5・6人が常に出番に備えていた。役者階層の最下部には3・4名の少年役者が存在した。彼らは形態上は幹部俳優の徒弟という形で演劇興行に関わっていたが、上演に際しては文字通りの少年役を始め、(声変わりするまでは)女優のいない劇団で女性登場人物を担当した。少年役者は年齢的には10代前半が多く、20才ぐらいまで女役を演じたと言われているが、その後は雇い役者から幹部へと進む者もいた。

劇団は役者以外にも様々な雑役係を雇っていたが、例えば、楽士、道具方、衣装係、料金徴収人、台本担当者などがその代表的なところで、中でも台本担当者 (a book-keeper) の仕事はこの時代の上演を理解する上で特に大切である。台本担当者は、劇団の生命線とでも言うべき台本に関わる様々な仕事——祝典局長への上演許可申請 (= 検閲)、役者個々への台詞抜き書き帳作成、台本の維持・管理——の他に、舞台監督やプロンプターの役目まで請け負っており、上演の中核的役割を果たしていた。

ところで、ここで注意しておきたいのは、上記の劇団組織はロンドンに本拠を置いていた、比較的財政規模の大きい一座のケースだということである。法令等によりロンドンを本拠地とすることができない劇団、あるいはベスト流行のためロンドンで興行が禁止されていた期間の場合、役者たちは地方巡業でしのぐしかなかったが、そうした旅回りの一座の規模は6-8人(時に10人以上)というのが普通で、携帯品も衣装のみであることが多かった。

役者たちの賃金も階層に応じて大きな開きがあった。シェイクスピアやアレンのような幹部俳優クラスは蓄財に成功し、土地を購入したり騎士の称号を得たりする者もいたが、それ以下の役者や裏方たちは、当時の一人前の職人の日

当7-8ペンスと大差のない賃金を支払われていた。例えば、ヘンズロウは1597年ケンダル (William Kendall) という役者と雇用契約を交わしているが、その中でヘンズロウは、ロンドン興行では週10シリング、地方公演では週5シリングの支払いを約束している。もちろん賃金水準は、時期・場所・上演の可否等で大きく変動する。時代は少し下がるが、1606年に出た作者不詳のパンフレット『ラツィーの亡霊』(*Ratsey's Ghost*)には、地方巡業の最良の役者でも時には15ペンスで満足しなければならない様が、描写されている。また、レッド・ブル一座に加入したクラーク (Roger Clarke) という役者は週6シリングの契約であったが、劇団の苦境時には2シリングにまで減額されている。

さて、次に劇団の上演方式であるが、すでに記述したように、日替わり演目の徹底したレパトリー・システムが採用されていた。つまり休演日である日曜を除いて、週6日6本の別個の芝居が舞台にかけられていた訳である (ただしこれは1595年後半の場合で、上演日の変動は著しく、図式化は困難)。新作は観客に人気があり、おまけに新作の初演時には通常より2倍の入場料を取ることができたため、ヘンズロウはこの点取り分け熱心で、海軍大臣一座に平均月2本の新作を上演させている。宮内大臣一座の方はこれほどではなかったが、それでも当時の役者の負担とそれをこなす能力は相当の水準にあったと言わなければならない。

演劇興行にとり最大の敵は上演の禁止であったが、大別するとこれには人為的なものと非人為的なものと2種類が存在した。非人為的なものとはペスト流行のことであるが、この疫病の危険性は政府枢密院およびロンドン市当局双方によって認識されていた。しかしその姿勢には微妙な相違があり、特に宗教上の立場から娯楽産業を敵視していた市当局が、疫病流行=神の怒りとの連想から演劇に向けた激しい非難には留意すべきである。ペスト流行時における上演の禁止は、1574年レスター伯一座に付与された特許状の中ですでに明記されていたが、その後1週間の死者数に基づいた基準線が設けられている。主要な劇場閉鎖年は、1581-82, 1592-93, 1603-04, 1608-09, 1609-10, 1625, 1630, 1636-37, 1640, 1641年で、これらの時期いくつかの劇団が危機に直面し、演劇界に再編が生じた。

人為的に演劇を規制したものは検閲である。当初、戯曲の上演検閲と出版検閲は管轄が分かれており、前者は祝典局、後者は高等宗務裁判所の担当であった。祝典局長の職務は、第1義的には君主制の維持や国家の治安に危害をもたらす危険要素の発見とその封じ込めにあるが、検閲対象となる劇団から検閲料

あるいは上演許可料を取ることで、劇団とは一種共生的関係にあったことも事実である。そのために祝典局長の検閲の実際は、必ずしも原理的なものではなくむしろプラグマティックであり、上演禁止の措置は皆無ではないが、かなり稀であった。事実、ティルニーの緩やかな上演管理に対する苦情や不満が、ロンドン市長の口から複数回発せられている。祝典局長が演劇全体に規制の目を光らせていたことには変わりはないものの、結果的には演劇産業の保護育成に貢献したことは強調しておかなければならない。この後1606-07年頃から、戯曲の出版検閲権も祝典局長の手に移る。ティルニーは死去する1610年まで局長職にあったが、実際には1606年頃からバック (Sir George Buc) が上演出版の検閲を行っていたと考えられている。バックの後はアストリー (John Astley) を挟んでハーバートへと局長職は引き継がれてゆくが、その権限はさらに拡大し、(ティルニーの時代から前例はあるが) 劇団設立や劇場建設の許認可権にまで本格的に発展する。検閲料の単価自体も値上がりし、その上許認可がもたらす利潤も相当のものであったらしく、局長職の役職継承権は売り買いの対象となったのである。検閲というものが人為的であるだけに、演劇に対するその功罪はより多面的に考察される必要がある。

References

- Bawcutt, N. W., ed. *The Control and Censorship of Caroline Drama: The Records of Sir Henry Herbert, Master of the Revels 1623-73*. Oxford: Clarendon P, 1996.
- Bentley, G. E. *The Jacobean and Caroline Stage*. 7 vols. Oxford: Oxford UP, 1941-68.
- . *The Profession of Dramatist in Shakespeare's Time 1590-1642*. Princeton: Princeton UP, 1971.
- . *The Profession of Player in Shakespeare's Time 1590-1642*. Princeton: Princeton UP, 1984.
- Bradbrook, M. C. *The Rise of the Common Player: A Study of Actor and Society in Shakespeare's England*. Cambridge: Cambridge UP, 1962.
- Chambers, E. K. *The Elizabethan Stage*. 4 vols. Oxford: Clarendon P, 1923.
- . *William Shakespeare: A Study of Facts and Problems*. 2 vols. Oxford: Clarendon P, 1930.
- Clare, Janet. 'Art made tongue-tied by authority': *Elizabethan and Jacobean Dramatic Censorship*. Manchester: Manchester UP, 1990.
- Dessen, Alan C. *Elizabethan Stage Conventions and Modern Interpreters*. Cam-

- bridge: Cambridge UP, 1984.
- Gurr, Andrew. *The Shakespearean Stage, 1574-1642*. 3rd ed. Cambridge: Cambridge UP, 1992.
- . *The Shakespearian Playing Companies*. Oxford: Oxford UP, 1996.
- . *Playgoing in Shakespeare's London*. 3rd ed. Cambridge: Cambridge UP, 2004.
- . *The Shakespeare Company, 1594-1642*. Cambridge: Cambridge UP, 2004.
- Harbage, Alfred. *Annals of English Drama 975-1700*. Rev. S. Schoenbaum. London: Methuen & Co. Ltd., 1964.
- Heinemann, Margot. *Puritanism and Theatre: Thomas Middleton and Opposition Drama under the Early Stuarts*. Cambridge: Cambridge UP, 1980.
- Henslowe's Diary*. Eds. with supplementary material, introduction and notes. R. A. Foakes and R. T. Rickert. Cambridge: Cambridge UP, 1961.
- Knutson, R. L. *The Repertory of Shakespeare's Company, 1594-1613*. Fayetteville: U of Arkansas P, 1991.
- McMillin, Scott and Sally-Beth MacLean. *The Queen's Men and Their Plays*. Cambridge: Cambridge UP, 1998.
- 太田一昭編。『初期英国演劇統制資料』福岡:九州大学大学院言語文化研究院, 2003.
- Potter, Lois, gen. ed. *The Revels History of Drama in English*. 8 vols. London: Methuen, 1975-83.
- Wickham, Glynne. *Early English Stages 1300 to 1660*. 4 vols. London: Routledge, 1959-2002.
- Wickham, Glynne, Herbert Berry and William Ingram, eds. *English Professional Theatre, 1530-1660*. Cambridge: Cambridge UP, 2000.